

令和元年5月30日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05141

研究課題名（和文）有機農業とコミュニティの深化：フィリピンとメキシコの比較

研究課題名（英文）Organic Agriculture and Community

研究代表者

中西 徹（NAKANISHI, TORU）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30227839

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,600,000円

研究成果の概要（和文）：初期条件に高い共通性を有するフィリピンとメキシコを対象として、基本仮説「有機農法の普及はコミュニティの深化をもたらす、それは農法のさらなる改良と普及に貢献するという累積過程を生む」について、社会ネットワークの動態を踏まえた上で、有機農産物の生産・流過程を比較検証した。グローバル化の中で地域を軸とする有機農業の発展方向には、「産消提携」型と「参加型認証制度」利用型の二つがあると思われるが、前者はコミュニティ内の農民間の緊密な結束を、後者は異なるコミュニティの農民間の連繫を前提としている。本研究では、地域研究の視角から、効果的な有機農業の発展戦略を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、発展途上国における「産消提携」とPGSの可能性に着目し、生産のみならず流過程を含め、参与観察や住み込み調査を含め地域に密着した実態調査を行うことによって、従来の発展途上国の有機農業と貧困緩和の研究の欠を補い、農民、消費者、NGO、地方政府の各主体に着目しつつ、環境保全と持続可能な発展を実現する有機農業政策の枠組みを構築し、フィリピンとメキシコに限らず、グローバル化における発展途上国の地域を軸とする有機農業の発展を考える際に統一視点を与える橋頭堡としての意義有する。

研究成果の概要（英文）：This comparative study of organic food system in the Philippines and Mexico clarified that organic farming contributed to community deepening, and that such community deepening contributed to the development of organic farming in turn, by analyzing both *tei-kei* type food system and participatory guarantee systems from the view point of community-based resources.

研究分野：地域研究，開発研究

キーワード：フィリピン メキシコ 有機農業 コミュニティ 少数民族

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景は、利潤最大化を志向する慣行農業に対するコミュニティ志向の有機農業の発展についての研究にあった。戦後、食糧不足が焦点であった発展途上国においては、1960年代以降、フィリピンとメキシコを拠点として、化学肥料と農薬の投入を前提とした稲、小麦、トウモロコシなどの改良品種が開発され、農村に広く普及した。この「緑の革命」は、食糧増産に大きく貢献したという評価が一般的であるように思われるが、科学的投入財の多投や種子の外部への依存が不可避となるという批判も強かった。

(2) このような背景から、1980年代以降、先進諸国に続き、発展途上国においても商業主義農業への対抗戦略として有機農業が開始されるようになった。有機農業の耕作地は小さいものの、現在、その需要は、中・高所得層を中心に増加傾向にあるという観察が新しい。

(3) しかし、グローバル化が進む現在、これまで通りの有機農業では持続性に脆弱さを抱えているという問題点が共有されるようになった。その中で、「産消提携」の変容と「参加型有機認証制度」(PGS: Participatory Guarantee System, 以下、PGSと略称)の誕生は大きな意義を有すると考えられる。本研究は、それが地域のコミュニティとどのような相関関係を有するかに着目した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、初期条件に高い共通性を有するフィリピンとメキシコを対象として、基本仮説「有機農法の普及はコミュニティの深化をもたらし、それは農法のさらなる改良と普及に貢献するという累積過程を生む」について、社会ネットワークの動態を踏まえた上で、有機農産物の生産・流通過程を比較検証し、環境保全と持続可能な発展を保証する新しい地域開発に寄与することである。

(2) グローバル化の中で地域を軸とする有機農業の発展方向には、「産消提携」型と「参加型認証制度」利用型の二つがあると思われるが、前者はコミュニティ内の農民間の緊密な結束を、後者は異なるコミュニティの農民間の連繫を、それぞれ前提としている。本研究の目的は、地域研究の視角から、効果的な有機農業の発展戦略のために両者を如何に結びつけていくかを、フィリピンとメキシコの事例を比較しつつ、検討することである。

3. 研究の方法

(1) フィリピン人・メキシコ人研究者らと共同して、異なる生態系における複数の農村を対象に、現地語を用い、有機農家と非有機農家が混在する農村について、参与観察による地域密着型調査を行う。

(2) その際、対象地域における「産消提携」とPGSの実態についての把握、実態調査と文献調査によって集団に固有な社会ネットワークの抽出と時間軸の策定を行った後、世帯基礎情報、農家経営状況、社会ネットワーク、有機農産物の地域流通過程のデータの収集、NGO、地方自治体、周辺村落との関係などの外的条件の変容の長期的把握を行う。

(3) 最後に、これらを総合して、「産消提携」とPGSを活用した有機農業の戦略を、それぞれの地域における初期条件と農民の有する社会ネットワークの変容に応じて検討し、環境保全と持続可能な発展を保証する新しい地域開発のあり方を提示する。

4. 研究成果

(1) フィリピンについては、フィリピン国立大学のマキト博士、メディナ博士、アテネオ・デ・マニラ大学のパウチスタ博士の協力の下、生産者側と流通側について集中的なインタビュー調査を実施した。すなわち、生産者側については、ルソン島では、中部ルソン地方(ヌエバ・エシーハ州)のギンバ市カバリエ口村および現地NGO: Gratia Plena Social Action Center, 南タガログ地方(ラグナ州)の現地NGO: Magsasaka at Siyentipiko para sa Pag-unlad ng Agrikultura), ダバオ州 Stan 神父経営の有機農園において、基本的農業生産および経営についての調査に加え、それぞれが有する社会ネットワーク、PGSおよび提携型システムの浸透度について聞き取りを行った。また、流通側については、ヌエバ・エシーハ州の Full of Grace とマニラ首都圏マカティ市とケソン市における富裕層向けの4カ所の有機農産物市場、マニラ首都圏マラボン市の貧困層向け市場の調査も併せて行った。

(2) この結果、依然として大都市の有機農業への提携型契約は困難であるものの、分断されているとはいえ、オープンな取引市場を通じての局所的市場圏が確立しつつあること、そして、今後は隣接する複数の地域間の協働を通じてそれらを束ねるブリッジ型のネットワーク拠点が必要とされていることがあきらかになった。今回の一連の調査によって、少しずつではあるが相互に関係性が弱かった地域間の交流が生まれつつあることも現地への研究還元の結果の一つであると考えられる。

(3) メキシコにあっては、大規模で輸出志向の有機農業生産の増大がみられるが、同国における小農の重要性を鑑みて、小農の間での有機農業の普及過程とその困難を研究対象とした。具体的には主として、参加型有機認証を取得した篤農の属するコミュニティ(中部トラスカラ州)、マヤ農民のための有機農民学校(南部ユカタン州)という2つの事例の調査研究を行ってきた。

(4) 期間内の関連成果として、日本語論文2本(うち査読付き1本)、スペイン語の著書1冊、海外学会での報告1回のほか、2019年秋にラテンアメリカの事例に詳しいアグロエコロジーの翻訳書を刊行予定である。

(5) 両国の地域主義的な有機農業の発展を検討することによって明らかになったのは、弱者にとって有機農業が有する対強者への戦略的特性の重要性である。それは、冷戦終結後の国際環境の変化の過程において、とくに顕著になってきていると考えられる。すなわち、有機農業は元来、優れて地域主義的な特質を有する。それは、地域固有の諸条件に適応した技術による農法にもとづいて生産が行われてきたことに起因し、基本的には種子選定から販路に至るまで、地域内の民衆知が大きな役割を果たしている。このため、画一化による大量生産に馴染まず、グローバル化による単一市場化に対して独自の対応をとることが可能になる。

(6) 流通にあっては、その典型的な事例が日本において定型化された流通過程の「産消提携」であるが、両国において観察される顕著な特徴は、緩やかな小地域の連合体を現地NGOと農民組合が再編・組織化し、農産物とその加工品を、サービスという付加価値に応じて、富裕層と非富裕層の異なる階層向けに提供するという生産単位の戦略である。

とくに、市場のグローバル化への対応として、商品の質に応じて、巨大流通業が参入する前に、PGSを利用した市場開拓に乗り出している点は特筆すべきであろう。このような事例は、有機農産物の特性を生かした市場戦略であり、今後は、フィリピンでは、現地NGO、農民組合、地方政府の三者間の共同が大きな役割を有することになるであろう。

(7) 以上の分析結果は、グローバル化における発展途上国の地域を軸とする有機農業の発展を考える際に、その戦略に統一的視点を与えるための橋頭堡の基礎を提示し得るものであると考えられる。研究成果の発表については、最終年度には、フィリピンでは、研究代表者中西が、フィリピン国立大学ロスバニョス校と国際学術会議における論文提出と報告(いずれも英語)によって公表し、さらに、雑誌『東洋文化』に「第4次産業革命と地域研究：フィリピンにおける都市貧困層と有機農業」(仮題、近刊)として公表予定である。また、メキシコについては、研究分担者受田が政治経済学における理論的側面に着目し Rosset, Peter and Miguel Altieri, *Agroecology: Science and Politics* の訳出(近刊)を通じて研究の一層の発展を図った。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

- (1) 受田宏之(2018), 「新刊紹介 太田和宏『貧困の社会構造分析』」, 『国際開発研究』, 第27巻第2号, 163~166頁, 査読無.
- (2) 受田宏之(2018), 「AJELの歩みを振り返る」, 『ラテンアメリカ研究年報』, 第38巻, 97~98頁, 査読無.
- (3) Nakanishi, Toru (2017), "Book Review: William Easterly, *The Tyranny of Experts: Economists, Dictators and the Forgotten Rights of the Poor*," *Development Economics*, Vol. 54 No.2, pp.198-201, 査読無.
- (4) 受田宏之(2017), 「援助は「悪」をなくせるか：南北アメリカにおける麻薬対策」, 『東洋文化』第97巻, 77~98頁, 査読有.
- (5) 受田宏之(2017), 「アグロエコロジーは遺伝子関連技術のオールタナティブになり得るか」, 『農業と経済』, 第83巻第2号, 158~164頁, 査読無.
- (6) 受田宏之(2017), 「小農と有機農業の普及ネットワーク」, 『ラテン・アメリカ論集』, 第50巻, 33~59頁, 査読有.

[学会発表](計10件)

- (1) Nakanishi, Toru (2018), "Outwitting the Strong: Organic Food for the Weak," *the 4th Philippine Studies Conference in Japan*, November 17-18. (広島大学)
- (2) Nakanishi, Toru (2018), "Food and Health for the Weak in a New World," *Community Currency Seminar*, (国際学会, University of the Philippines, Los Banos).
- (3) 受田宏之(2018), 「テクノクラートのメキシコと多文化主義のメキシコ：21世紀のメキシコにおける先住民問題」, 『第55回ラテン・アメリカ政経学会全国大会』.
- (4) Ukeda, Hiroyuki (2018), "Mas alla de Santiago Levy: La economia politica de la informalidad en Mexico," *Latin American Studies Association Congress*, (国際学会, Barcelona, Spain).

- (5) Ukeda, Hiroyuki (2017), "Peasants and Networks for Organic Agriculture Promotion: Participatory Guarantee System in Mexico," *Pequeños productores y comerciantes locales de la globalización desde abajo*, (国際学会, Latin American Studies Association).
- (6) 受田宏之 (2017), 「組織犯罪と暴力の関係を理解する: 大衆歌謡の歌詞分析」, 『第 53 回ラテン・アメリカ政経学会定期大会』 (東京大学)
- (7) Ukeda, Hiroyuki (2017), "Popular Image of Outlaws and the State: Organized Crime and Violence Seen Through Popular Songs," *the IV Congreso Internacional de Ciencia Política en Mexico*, (国際学会, メキシコ)
- (8) Ukeda, Hiroyuki (2017), "Por que los narcos de Mexico son mas violentos que los yakuza de Japon: Normas sobre el crimen organizado reflejadas en canciones populares," *the Workshop on Democracy and Social Movements after the Neoliberalism*. (国際学会, 東京大学)
- (9) 中西徹 (2016), 「有機農家丹野喜三郎さんの 5 年間の歩み」, シンポジウム「東日本大震災から 5 年: 人間の安全保障の視点からみた復興の課題」(東京大学)
- (10) Ukeda, Hiroyuki (2016), "Tigres del Norte and Kitajima Saburo: Organized Crime and Violence Seen Through Popular Songs," LAINAC Workshop on the Future of Democracy after Neoliberalism (国際学会, 東京大学)

[図書](計 8 件)

- (1) 受田宏之(受田千穂と共訳)(近刊), ロゼット, ピーター/ミゲル・アルティエリ 『アグロエコロジー入門: その理論、実践と政治』, 明石書店.
- (2) 受田宏之(星野妙子ほかと共著)(2019), 『メキシコの 21 世紀』 アジア経済研究所.
- (3) 中西徹(大野拓志ほかと共著)(2017)『フィリピンを知るための 63 章』明石書店
- (4) 受田宏之(星野妙子ほかと共著)(2017)『21 世紀のメキシコ: 近代化する経済, 分極化する政治と社会』 アジア経済研究所.
- (5) 中西徹(トラン・ヴァン・トゥ, マキト・フェルディナンドほかと共著) (2016), 『ASEAN 経済新時代と日本』 文眞堂.
- (6) 受田宏之(長谷部美佳ほかと共著) (2016) 『多文化社会読本: 多様な世界, 多様な日本』東京外国語大学出版会.
- (7) 中西徹(内田隆三ほかと共著)(2015)『現代社会と人間への問い』せりか書房.
- (8) Hiroyoshi Ukeda, Atilano Ceballos and Nakanishi, Toru (2015), *Otra Economía es Posible*, U Yits Ka ' an, Yucatan, Mexico.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 受田宏之

ローマ字氏名: UKEDA, Hiroyuki

所属研究機関名: 東京大学

部局名: 大学院総合文化研究科

職名: 教授

研究者番号(8桁): 20466816

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: マキト, フェルディナンド

ローマ字氏名: MAQUITO, Ferdinand

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。